

株式のご案内

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月
基準日	期末配当金 3月31日 中間配当金 9月30日
証券コード	7298
株主名簿管理人 (特別口座の口座管理機関)	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
同事務取扱場所	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
郵便物送付先	〒168-0063 東京都杉並区和泉二丁目8番4号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
電話照会先	0120-782-031 ご利用時間9:00～17:00（銀行休業日を除く）
同取次窓口	三井住友信託銀行株式会社 全国各支店

お知らせ

住所変更、単元未満株式の買取・買増などのお申し出先について

株主様の口座のある証券会社にお申し出ください。
なお、証券会社に口座がないため特別口座が開設されました株主様は、特別口座の口座管理機関である三井住友信託銀行株式会社にお申し出ください。

未払配当金の支払いについて

株主名簿管理人である三井住友信託銀行株式会社にお申し出ください。

ウェブサイトのご案内

八千代工業 検索



環境報告書2016

当社の環境への取り組みを環境報告書として掲載しています。

<http://www.yachiyo-ind.co.jp/csr/>



IR・決算資料はこちら <http://www.yachiyo-ind.co.jp/ir/>

八千代工業株式会社

埼玉県狭山市柏原393番地
電話04 - 2955 - 1211（代表）
<http://www.yachiyo-ind.co.jp/>



第64期(2016年度) 上半期 事業ご報告

【2016年4月1日～2016年9月30日】

株主通信



Index

社長インタビュー	1
地域別セグメントの業績（上半期）	5
連結財務諸表	7
FOCUS	9
トピックス	11
製品情報	13
会社概要／株式の状況	14
株式のご案内／ウェブサイトのご案内	裏表紙

八千代工業株式会社 証券コード：7298



代表取締役社長 やまぐち じろう 山口 次郎

プロフィール

生年月日	1960年12月6日
略歴	1988年 5 月 株式会社本田技術研究所に入社 2006年 4 月 クルマの機種開発を担当 2009年 4 月 同社 執行役員 商品開発室室長 2012年 4 月 同社 常務執行役員 2014年 4 月 同社 取締役専務執行役員 四輪R&Dセンター担当 2016年 6 月 当社 代表取締役社長

ご挨拶

株主の皆様には、日頃より当社グループ事業へのご理解とともに厚いご支援を賜り、誠にありがとうございます。

本年6月21日付で代表取締役社長に就任しました。ここに、私の経営に対する考えと当社グループの事業展開についてご説明させていただきます。

2016年11月

代表取締役社長 山口 次郎

Q1 社長就任から4カ月余りが経過しましたが、あらためて経営者としての考えをお聞かせください。

A 私は、本田技術研究所に入社してから、開発業務を通じてヤチヨと多くの関わりがありました。サンルーフの開発はかつて本田技術研究所からヤチヨに移管されたものですが、共同で約1年かけて先行開発に取り組んだことがありまして、移管当初から10年足らずのうちに競合他社に負けない独自製品を開発する力を付けていく様子を目の当たりにし、非常に現場力が強いという印象を持っていました。クルマ全体の開発を担当していた時には、重要な機能部品である燃料タンクの戦略策定にも携わりました。また、四日市製作所で受託生産している軽オープンスポーツ「S660」については、開発当初からチームをバックアップしてきましたので、ヤチヨとは部品から完成車まで深く関わってきた間柄と言えます。

企業理念においても、「ヤチヨ企業理念」と「Honda フィロソフィー」はいずれも「存在を期待される企業」としてのあり方を根底に置いており、合致する点が多くあると感じています。

そうした思い入れのある会社の新社長として、今後の経営においては、Hondaとのより強固な関係を築き、Hondaブランドの価値向上に貢献していきたいと考えています。これは要望に応えるだけでなく、当社グループからの提案を期待していただき、それを受け入れてもらうスタンスでHondaと共存共栄することです。その取り組みを通じて高めた技術力と提案力を、他社販売においても発揮していく方針です。

さらに、Hondaにない少量生産ラインの強みを活かした四日市製作所では、一人ひとりのお客様に喜んでいただけるクルマづくりを引き続き強化していきます。

Q2 現在の経営課題と今後の成長に向けた展望についてご説明願います。

A 当社グループは「ヤチヨ2020年Vision」のもと、真の世界ワイドプレイヤーを目指し、技術開発に注力するとともに販路拡大につながる仕込みを進めてきました。その中で、車種の増加傾向に対応すべく、限られた経営資源の投入を最適化し、開発から販売までのものづくり全般をいかに効率的に行うかが経営課題となっています。

一方、外部環境の変化による経営課題では、為替リスクの回避が重要になっています。現在の当社グループは、サンルーフ、燃料タンクともに海外生産の割合をかなり高めてきていると同時に、構成部品も含めたサプライチェーンについても、為替影響の最小化に向けて、生産配分を検討していく必要があると考えています。

具体的な成長戦略としては、燃料タンクでは自動

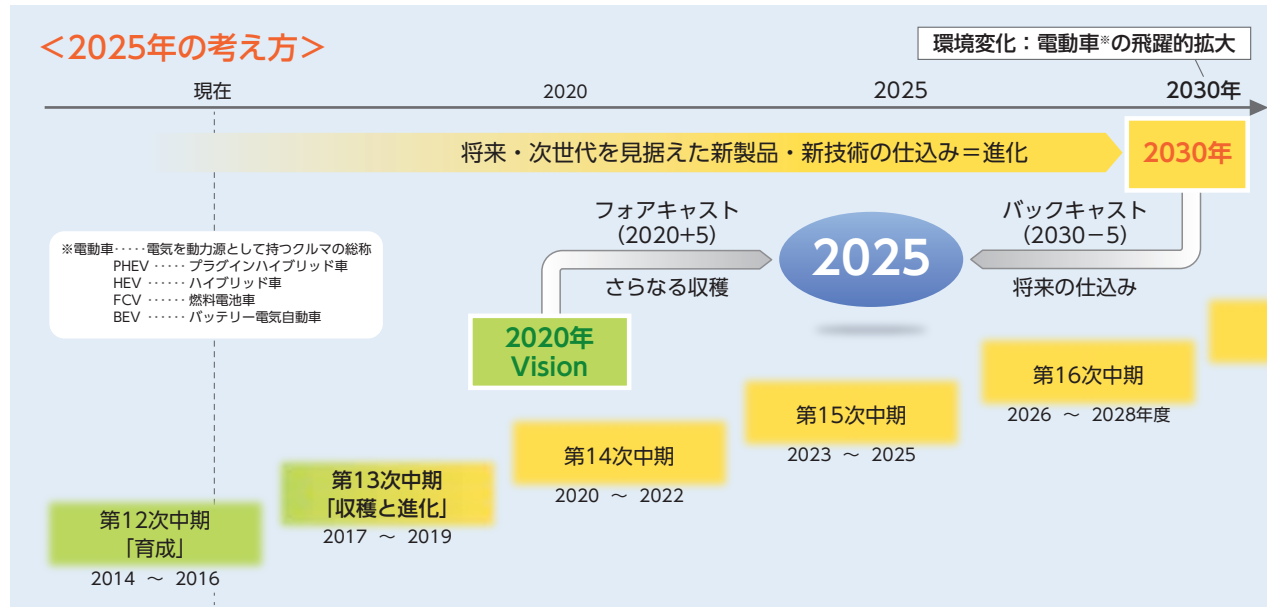
車の電動化の波に対応し、プラグインハイブリッド車に求められる高密封・高強度タンクの技術開発により、中長期における競争力を高めていきます。さらには「エネルギーストレージ」展開の一環として、燃料電池車用水素タンクの開発も進めていきます。

サンルーフでは、北米や中国など海外市場におけるSUV車のサンルーフ需要を捉えるべく、パノラマサンルーフの技術開発をさらに加速していきます。その上で将来におけるクルマの価値の変化に対応した製品ラインアップを考えていく必要があります。

将来に向けた新規事業については、先に述べました「エネルギーストレージ」の他に、軽量化に資する「CFRP（炭素繊維強化プラスチック）」を使った技術・製品を開発しています。その方向性は、自動車メーカーの軽量化ニーズに対応するための技術開発と、当社グループが手掛ける部品の軽量化に向けた製品開発の2つがあります。いずれも中長期的な視点で継続的な開発を要する領域であり、当社グループが目指す「卓越した技術」の実現に向けて、重要な戦略として取り組みを続けていく方針です。

もう1つお伝えしたいのが、今後の完成車事業についてです。Hondaからの受託生産である従来の完成車事業を活かしながら、特装車などの企画力・提案力を高めることで受注を増やし、「ヤチヨブランド」を築いていきたいと考えています。クルマという直接的な価値をお客様に届けることができる事業であり、お客様視点による提案性の高いものづくりを手掛けていきます。

以上のような事業領域ごとの戦略を踏まえ、当社グループは今、2025年に向けた中長期の方向性について検討を進めています。2020年から5年後に向けて今から積み重ねていくことに加え、自動車



の電動化が世の中に大きく広がる2030年を見据えたとき、その5年前に当社がどうなっているべきか、というバックカスティングで考える必要があります。

現在は第12次中期「育成の期」の最終年度であり、次の13中を「収穫の期」としていますが、これを「収穫と進化の期」として新たに設定し直し、2025年に向けた“進化の仕込み”に注力していくこととしました。

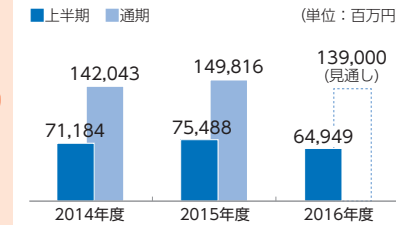
Q3 上期の営業状況と通期業績の見通しをお聞かせください。

A 上期の営業状況は、海外における受注が増加したものの、熊本地震による主要顧客の生産休止や為替換算上の影響などにより、減収減益（前年同期比）となりました。

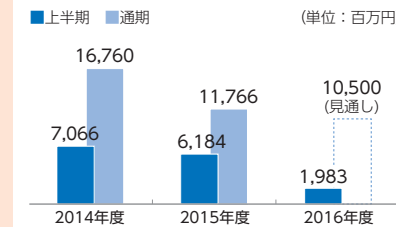
連結業績ハイライト

※国際会計基準

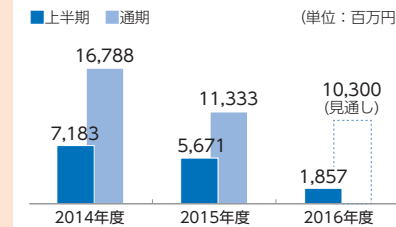
売上収益
64,949
百万円
(前年同期比14.0%減)



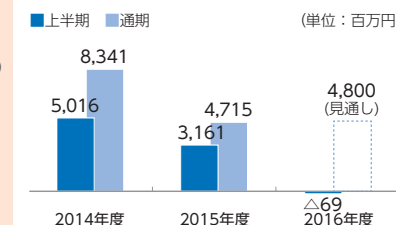
営業利益
1,983
百万円
(前年同期比67.9%減)



税引前利益
1,857
百万円
(前年同期比67.2%減)



親会社の
所有者に帰属する
当期利益
△69
百万円



下期は、自動車組立分野および二輪部品の挽回生産による増収と利益改善を見込んでいます。しかし通期業績予想については、上期の減収や為替換算上の影響などを踏まえて2016年4月28日に公表した通期業績予想（売上収益1,440億円、営業利益115億円、税引前利益113億円、親会社の所有者に帰属する当期利益55億円）を下方修正しました。

なお今回の第2四半期末配当は、予定通り1株当たり14円（前期比2円増配）とし、期末配当については、同14円（前期同額）を予定しています。

Q4 株主の皆様へのメッセージをお願いします。

A 当社グループは、Hondaグループの中で完成車を生産している唯一のサプライヤーです。その特長をもって技術力・提案力をさらに向上させ、「ヤチヨブランド」を確立し企業価値を高めることが、Hondaブランドの価値向上にもつながると考えています。

部品事業のグローバル展開は、Hondaへの供給だけでなく世界中の自動車メーカーに対し、卓越した技術による特長ある製品を供給し、グローバル市場で信頼される存在を目指してまいります。

株主の皆様におかれましては、引き続き当社グループへのご理解とともに一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

地域別セグメントの業績（上半期）

● 栃木研究所設立30周年

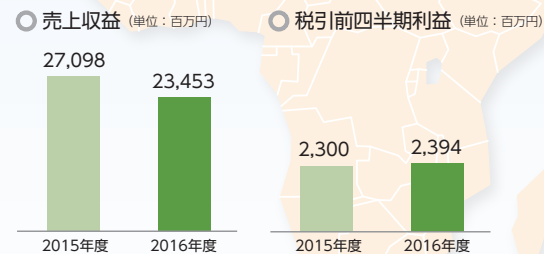
当社グループ初の研究開発拠点として、1986年1月に前身である「栃木技術センター」を設置。当初は製品図面を作成しコストを割り出すだけの業務でした。30年の研究開発の中で、当社でサンルーフと燃料タンクの機種開発が完結できるまでに開発力を培い、他社ではほとんど見られない耐火試験棟など試験設備の充実も図ってきました。

主力製品の開発における頭脳として、今後も開発力を強化していきます。



さらなる開発力の強化を誓う

アジア



連結子会社であるSYC〔タイ〕及びGTA〔ベトナム〕における受注の増加はあったものの、SGM〔タイ〕における受注の減少や為替換算上の影響などにより、売上収益は、前年同期に比べ36億4千5百万円、13.5%の減収となりました。税引前四半期利益は、為替換算上の影響はあったものの、受注の増加などにより、前年同期に比べ9千4百万円、4.1%の増益となりました。

拠点

インド

- YIM〔ヤチヨ インディア マニファクチュアリング〕
- GIA〔ゴウシ インディア オートパーツ〕

タイ

- SYC〔サイアム ヤチヨ〕
- SGM〔サイアム ゴウシ マニファクチュアリング〕

インドネシア

- YTI〔ヤチヨ トリミトラ インドネシア〕

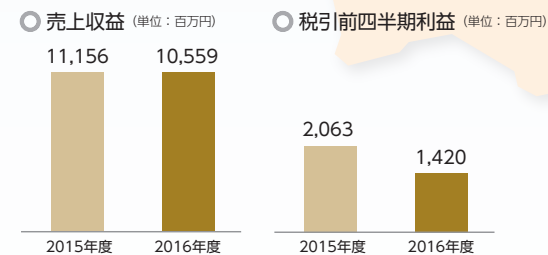
ベトナム

- GTA〔ゴウシ タンロン オートパーツ〕

フィリピン

- GPI〔ゴウシ フィリピン〕

中国

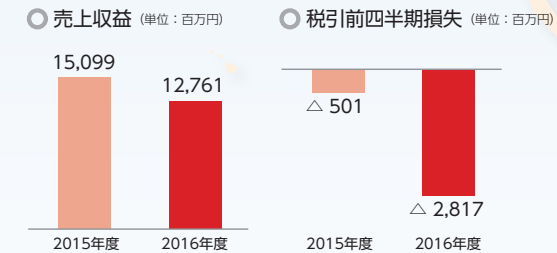


連結子会社であるYWMにおける受注の増加はあったものの、為替換算上の影響などにより、売上収益は、前年同期に比べ5億9千7百万円、5.4%の減収となりました。税引前四半期利益は、受注の増加はあったものの、機種構成変化や償却費の増加、為替換算上の影響などにより、前年同期に比べ6億4千3百万円、31.2%の減益となりました。

拠点

- YZM〔八千代工業 (中山)〕
- YWM〔八千代工業 (武漢)〕

日本



熊本地震の影響による主要顧客の生産が休止したことに伴う受注の減少などにより、売上収益は、前年同期に比べ23億3千8百万円、15.5%の減収となりました。税引前四半期損失は、受注の減少などにより、前年同期に比べ23億1千6百万円の減益となりました。

拠点

〔埼玉〕

- 本社
- 埼玉研究所
- 柏原工場

〔栃木〕

- 栃木研究所

〔三重〕

- 鈴鹿工場
- 亀山事業所
- 四日市製作所

〔熊本〕

- 合志技研工業
- ウエムラテック
- 合志テック

拠点

米国

- YOA〔ヤチヨ オブ アメリカ〕
- USY〔ユー エス ヤチヨ〕
- AYM〔イー ワイ マニファクチュアリング〕
- YMA〔ヤチヨ マニファクチュアリング オブ アメリカ〕

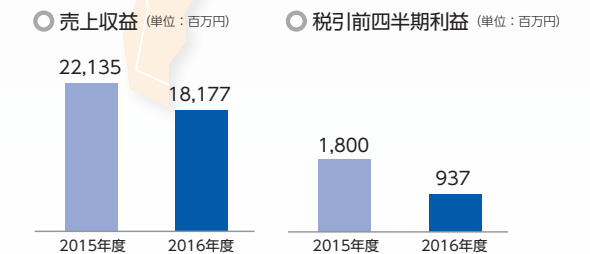
ブラジル

- YBI〔ヤチヨ ド ブラジル インダストリア エ コメルシオ デ ペサス〕

メキシコ

- YMM〔ヤチヨ メキシコ マニファクチュアリング〕

米州



為替換算上の影響や連結子会社であるUSY〔米国〕における受注の減少などにより、売上収益は、前年同期に比べ39億5千8百万円、17.9%の減収となりました。税引前四半期利益は、為替換算上の影響や受注の減少、機種構成変化などにより、前年同期に比べ8億6千2百万円、47.9%の減益となりました。

四半期連結財政状態計算書（要旨）

	前年度末 2016年3月31日	当上半期末 2016年9月30日
資産		
流動資産		
現金及び現金同等物	15,472	14,078
営業債権及びその他の債権	31,198	27,207
棚卸資産	9,507	10,945
その他	3,084	2,785
流動資産合計	59,260	55,015
非流動資産		
有形固定資産	49,926	47,620
無形資産及びのれん	4,893	5,959
退職給付に係る資産	1,148	1,111
その他	2,615	2,989
非流動資産合計	58,582	57,679
資産合計	117,842	112,694

財政状態の説明

●資産合計

前年度に比べ51億4千8百万円の減少となりました。減少した要因は、棚卸資産の増加はあったものの、営業債権及びその他の債権が減少したこと、また、為替換算上の影響などによるものであります。

●負債合計

前年度に比べ10億5百万円の増加となりました。増加した要因は、営業債務及びその他の債務の減少や

（単位：百万円）
（単位未満四捨五入）

	前年度末 2016年3月31日	当上半期末 2016年9月30日
負債及び資本		
負債		
流動負債		
営業債務及びその他の債務	22,808	21,101
借入金	10,350	14,124
その他	5,265	6,044
流動負債合計	38,423	41,269
非流動負債		
借入金	6,902	5,111
退職給付に係る負債	5,479	5,726
その他	5,076	4,780
非流動負債合計	17,458	15,617
負債合計	55,880	56,886
資本		
資本金	3,686	3,686
資本剰余金	3,473	3,473
利益剰余金	41,530	41,125
自己株式	△ 25	△ 25
その他の資本の構成要素	2,988	△ 1,604
親会社の所有者に帰属する持分合計	51,651	46,654
非支配持分	10,311	9,154
資本合計	61,962	55,808
負債及び資本合計	117,842	112,694

為替換算上の影響はあったものの、借入金が増加したことなどによるものであります。

●資本合計

前年度に比べ61億5千4百万円の減少となりました。減少した要因は、その他の資本の構成要素が減少したことなどによるものであります。

四半期連結損益計算書（要旨）

	前上半期末 自2015年4月 1 日 至2015年9月30日	当上半期末 自2016年4月 1 日 至2016年9月30日
売上収益	75,488	64,949
売上原価	△ 62,386	△ 55,943
売上総利益	13,102	9,006
販売費及び一般管理費	△ 5,237	△ 4,982
研究開発費	△ 1,663	△ 1,955
その他の損益	△ 19	△ 87
営業利益	6,184	1,983
金融損益	△ 515	△ 125
持分法による損益	2	－
税引前四半期利益	5,671	1,857
法人所得税費用	△ 1,729	△ 1,258
継続事業からの四半期利益	3,942	599
非継続事業からの四半期利益	159	－
四半期利益	4,102	599
四半期利益の帰属		
親会社の所有者	3,161	△ 69
非支配持分	941	668

四半期連結包括利益計算書（要旨）

	前上半期末 自2015年4月 1 日 至2015年9月30日	当上半期末 自2016年4月 1 日 至2016年9月30日
四半期利益	4,102	599
その他の包括利益		
純損益に振り替えられることのない項目	△ 438	51
純損益に振り替えられる可能性のある項目	△ 2,496	△ 5,600
その他の包括利益合計	△ 2,934	△ 5,549
四半期包括利益	1,167	△ 4,950
四半期包括利益の帰属		
親会社の所有者	1,008	△ 4,661
非支配持分	159	△ 289

四半期連結キャッシュ・フロー計算書（要旨）

	前上半期末 自2015年4月 1 日 至2015年9月30日	当上半期末 自2016年4月 1 日 至2016年9月30日
営業活動による キャッシュ・フロー	7,668	5,121
投資活動による キャッシュ・フロー	△ 2,164	△ 5,821
財務活動による キャッシュ・フロー	△ 4,983	794
現金及び現金同等物の 増減額（△は減少）	521	94
現金及び現金同等物に 係る換算差額	△ 1,106	△ 1,488
現金及び現金同等物の 期首残高	18,530	15,472
現金及び現金同等物の 四半期末残高	17,945	14,078

キャッシュ・フローの説明

●営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動の結果得られた資金は、税引前四半期利益18億5千7百万円、減価償却費及び償却費37億3千6百万円などはあったものの、法人所得税の支払額11億4百万円などにより、前年同期に比べ25億4千7百万円減少し、51億2千1百万円（前年同期は76億6千8百万円の収入）となりました。

●投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動の結果支出した資金は、有形固定資産の取得による支出26億4千7百万円、連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出28億3百万円などにより、前年同期に比べ36億5千7百万円増加し、58億2千1百万円（前年同期は21億6千4百万円の支出）となりました。

●財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動の結果得られた資金は、長期借入金の返済による支出28億2百万円、配当金の支払額13億7百万円などはあったものの、短期借入金の純増加額47億5千1百万円などにより、前年同期に比べ57億7千7百万円増加し、7億9千4百万円（前年同期は49億8千3百万円の支出）となりました。

新たなクルマづくりを実現

Honda S660 MUGEN RAのオールインライン架装

四日市製作所では、少量でもお客様に必要とされる福祉のクルマ、働くクルマ、趣味のクルマなどの特装領域の拡大に向けて“少量生産特殊工場”を目指し、クルマづくりの変革に取り組んでいます。

今、Honda S660をベースにフロントグリルや足回り、内装に専用部品を装備する無限*コンプリートカー「Honda S660 MUGEN RA」を、四日市製作所で生産しています。一般的な量産ラインとしては珍しい、全ての架装パーツを量産ライン上（インライン）で組み付ける“オールインライン架装”という、当社で初めての生産方法を実現しました。

※ 株式会社M-TECが展開するHonda車向けのアフターパーツブランド。専用パーツの組み替えや、特別な調整を施すなどしたコンプリートカーも手掛ける。

当社独自の提案によって実現

当社が長年にわたるクルマづくりで培ってきた熟練の生産技術と、無限ブランドが持つ高品質なパーツとコンプリートカーの開発力。これらの持ち味をお互いが最大限に活かすことでより高品質で魅力的な製



量産ライン上で専用ホイールを取り付ける

品を生み出せることから、MUGEN RAのインライン架装は実現しました。

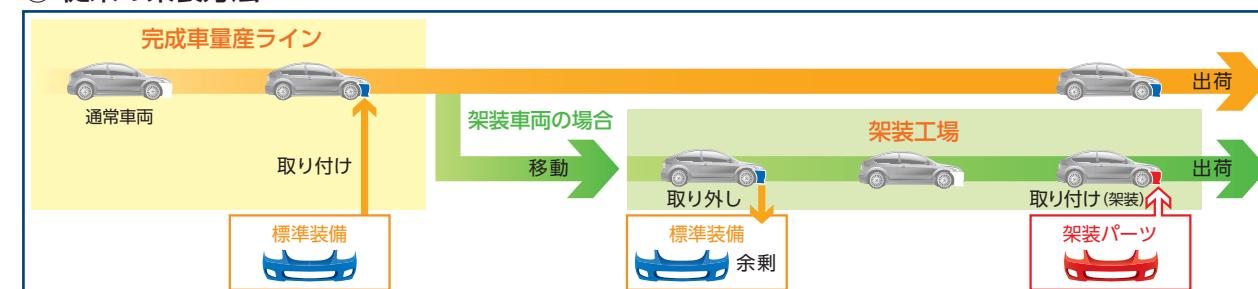
当社からの独自の取り組みとして全ての専用パーツをインラインで組み付ける提案をし、現在、S660やトラックなどと同じ量産ラインでMUGEN RAも流動させ、コンプリートカーとしています。

オールインライン架装

従来の架装方法（図①）では、通常生産と同様にラインオフしたクルマをいったん架装工場へ送り、新しくパーツを組み付けたり、別のパーツに交換したり、特別な調整を施したり、といった別作業を加えていました。これに対してインライン架装（図②）は、それらの作業を通常車両と同じラインで流動しながら実現する生産方法です。

この方法では、クルマを架装工場へ移動する必要がなくなり、交換パーツにおいては、標準装備の搬

① 従来の架装方法



② インライン架装



※ 実際のMUGEN RA専用パーツは製品情報（13ページ）をご覧ください。

送や取り外しの作業を省くことができます。このことから、生産効率を大幅に向上させるだけでなく、パーツ自体の無駄を発生させることがなくなり、環境施策としても効果があります。

今回、MUGEN RAの専用部品12点すべてをインラインで完結させ、アウトラインの架装は一切ないという、“オールインライン架装”を実現しました。これは四日市製作所独自の提案と工夫から成り得たものであり、ヤチヨ初の試みでもあります。その効果としては、一般的なコンプリートカーの価格がベース車の約1.7倍とされているのに対して約1.3倍に抑え、魅力あるMUGEN RAを欲しいお客様の手に届く価格とすることに成功しました。

企画力と技術力を磨き、提案型の完成車事業へ

通常の量産ラインで他社ブランドのクルマを生産するにあたっては、標準装備と無限の専用パーツが混在する物流をどう成立させるか、いかに品質を維持向上するか、コンプリートカーの適法性をどう担保するかなど、いくつもの困難がありました。これらをオール四日市製作所の知恵とアイデアで乗り越え、当社として新たなクルマづくりの姿を示すことができました。

四日市製作所は、軽自動車の量産と特装車を手掛け、経験と技術力を培ってきました。今後もこのような特殊なクルマづくりに磨きをかけ、少量でも必要とされるクルマをヤチヨ発として提案し、お客様に笑顔と満足をお届けしていきます。

土田選手、リオデジャネイロパラリンピックを終え、新たな決意

悲願の金メダル獲得に向けて出場した、リオパラ女子車いすマラソン。2016年9月18日に決勝を戦った結果はトップとわずか1秒差の4位、メダルには届きませんでした。2秒ほどの間に6位までの選手がなだれ込むという最後まで混戦のレースとなり、土田選手は世界のトップアスリートとしての実力を証明してみせました。

土田選手は数多くのレースで優勝を飾り、世界記録も持っていますが、パラリンピックのマラソンでは金メダルを獲得していません。当社がCFRP製の陸上競技用車いす（レーサー）を手掛けるタイミングで2014年10月に選手として迎え入れ、これまで株主の皆様からもエールを受けながら、二人三脚で成長してきました。4位という結果は非常に悔しいものですが、2004年アテネ大会で銀メダルを獲得して以来、実力を発揮して走り切ることができ、土田選手にとって8年越しの大きな価値を持つ大会となりました。

今後の選手生活について土田選手は、「これからもまだやれることがある、まだ進化できる。そして皆さんと一緒に喜びたい」と現役続行を表明しました。当社も、土田選手に寄り添ってきた当社にしかできないレーサーづくりをさらに極め、土田選手の夢の実現を全従業員で応援しながら、より力強くサポートしていきます。

来年度から土田選手は、『アボット・ワールドマラソンメジャーズ』に挑戦していきます※。4年後の東京パラも視野に入れながら、その1試合1試合を着実な歩みとする予定です。当社の極〈KIWAMI〉が土田選手とタッグを組んで2年、これからもご声援をよろしく願います。

※ 東京・ボストン・ロンドン・ベルリン・シカゴ・ニューヨークの世界6大マラソンおよびIPC陸上競技世界選手権大会とパラリンピックの成績を1年毎にポイント制で争う陸上競技シリーズに参戦します。

未来を担う子どもたちに“ものづくり”の伝承

当社は2016年10月19日、東京都台東区立忍岡小学校の5年生を対象とした研究授業を行い、レーサーの技術者が直接、講師を担当しました。

テーマは「世界に羽ばたく日本の技術」とし、本田宗一郎氏がホンダ太陽の設立に込めた思いや、当社がレーサーの開発を始めた理由、パラリンピックで金メダルを狙えるレーサーを選手と二人三脚でつくり上げる苦労や喜びを伝え、未来を担う子どもたちにもものづくりの楽しさや、障がいがある個性、持ち味であることを学んでもらいました。当社のレーサーは先端素材のCFRP製であること、また障がい者向けの製品であることから、当社だからこそ伝えられる授業とすることができました。

これまでも当社は陸上競技部による小学児童対象のかけっこ教室などに参画しており、この研究授業への協力も社会に貢献できることのひとつと考えました。こうした活動を通して、今後も日本のものづくりの地力向上に寄与していきます。



世界最高の舞台でレースが始まる瞬間



当社の報告会で今後の抱負を語る土田選手



一人ひとり乗車してもらいレーサーを体感

四日市製作所で一般の方に向けて工場見学を開始

四日市製作所ではお客様の期待を超える高品質なクルマをお届けできるよう、日々努力と工夫を積み重ねています。

そのような中、S660の生まれ故郷を多くの方に見ていただこうと、四日市製作所が自ら工場見学を企画し、2016年10月21日に初回開催の運びとなりました。

手を伸ばせば届くほどのラインサイドをご案内し、また製造スタッフとのコミュニケーションの時間を設けるなど、一般的な工場見学には見られない、より“生産現場”が感じられるプログラム内容としました。来場者の方からは、「生まれ故郷を見ることができS660への愛着が増した」「最高の1台をありがとう、大切に乗ります」「混流生産の中、ムダのない作業に驚いた」などのとても励みになるお言葉をいただき、お客様に喜んでいただただけでなく当社もクルマづくりの喜びを改めて感じる機会となりました。

当社はこれからも製品を通じてお客様に喜びを提供し、笑顔と満足をお届けできるようさまざまな検討を続けていきます。

本工場見学は株主の皆様もお申し込みいただけます。
よろしければご検討ください。

〈四日市製作所 工場見学 ～S660 Factory Tour～〉

<http://www.yachiyo-ind.co.jp/s660/factorytour/>



来場者の方と製造スタッフが直接コミュニケーションを深める

サンルーフ生産30周年

当社は、1986年6月に柏原工場にて生産を開始したサンルーフを30年以上にわたってつくり続け、主力製品に成長させてきました。今では、機種開発から一貫加工までの技術を身に付け、Hondaを主要顧客としながら他の自動車メーカーへも供給し、ニーズに応じた製品ラインアップの拡充をさらに進めています。

サンルーフはクルマの全てに搭載される製品ではありませんが、だからこそ魅力を訴求していく必要があります。サンルーフが装着されながらも広くて静かなキャビンスペースを確保したい、運転しながら季節ごとの光や色の移ろいをより感じたいなど、多様なニーズに応えられるよう、薄型軽量化や開口部の拡大といった商品性を高めており、いまやデザイン性も重要となっています。

市場としては、北米と中国における割合が依然高く、新興国へも広がりを見せ始めています。YMA (U.S.A.) では、バーチャル設計によって構築した高効率な生産ラインを導入し、初めてサンルーフの量産を開始しました。現在、パイロットやオデッセイ向けに供給しています。また、拡大しつつあるタイヤの需要に向けて、まずはYWM (中国) から供給し、Hondaタイヤのシビックに搭載されています。日本を中心として各現地法人の生産能力を活かし、ニーズに応じた最適なグローバル生産体制としていきます。

当社は、クルマの価値を高めるサンルーフの魅力をづくり手として提案し続けるとともに、お客様のニーズに確実に応える製品開発とグローバルオペレーションをさらに進化させていきます。

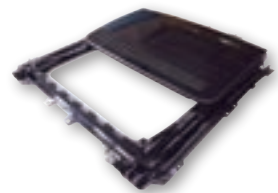


マザー工場である柏原工場における現在のサンルーフ製造

当社グループの主な製品

四輪部品

サンルーフ



燃料タンク



二輪部品

マフラー



メタルキャタライザー

鉄・アルミフレーム



完成車

アクティ・トラック

法人特装车
(アクティ・バンへ架装)

製品特集

Honda S660 MUGEN RA … オールインライン架装によるコンプリートカー



フロントグリル

無限ロゴ入りメーター
ステアリングホイール
無限ロゴ入りプッシュスイッチシフトノブ/セレクトレバー
シフトブーツ
シリアルナンバープレート

シート



RAエンブレム



サスペンション



アルミホール



サイレンサー

Honda S660 MUGEN RAは株式会社M-TECの製品であり、当社が受託生産しています。これらの専用パーツをすべて量産ラインで組み付ける“オールインライン架装”によって生産しています。FOCUS (9ページ) もご覧ください。660台の限定生産です。製品や取扱販売店などの詳細は、無限公式サイトをご覧ください。 <http://www.mugen-power.com/>

会社概要

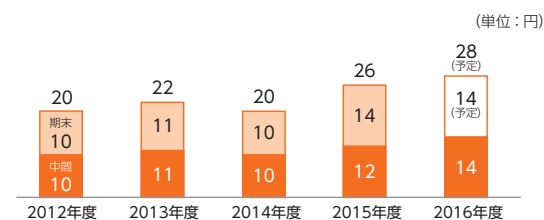
社名	八千代工業株式会社
英文社名	Yachiyo Industry Co., Ltd.
設立	1953年8月27日
資本金	3,685,600,000円
従業員数	単独 1,402名 連結 6,886名
本社	〒350-1335 埼玉県狭山市柏原393番地 04-2955-1211(代表)

役員

代表取締役社長	山口 次郎	常務執行役員	藤本 朋宏
代表取締役専務取締役	本告 次男	常務執行役員	木原 浩之
常務取締役	太田 康	執行役員	伊東 良和
常務取締役	北村 哲也	執行役員	栗原 貞幸
常務取締役	尾関 健一	執行役員	寺田 好伸
取締役	松原 美樹	執行役員	安田 哲
取締役	横瀬 勉	執行役員	長谷川吉保
監査役(常勤)	松川 実	監査役	山室 恵
監査役(常勤)	富永 和也	監査役	村松 昌信

(注.1) 横瀬勉氏は、社外取締役です。
(注.2) 富永和也氏、山室恵氏および村松昌信氏は、社外監査役です。

配当金の推移



当社は、株主の皆様に対する利益還元を経営の最重要課題の一つとして位置づけており、世界的視野に立って事業を展開し、企業価値の向上に努めております。

成果の配分にあたりましては、今後の資金需要などを総合的に考慮し、配当につきましては、長期的な視点に立ち連結業績を考慮しながら実施することを方針としております。

株式の状況

発行可能株式総数	70,000,000株
発行済株式の総数	24,042,700株
株主総数	2,735名

大株主の状況

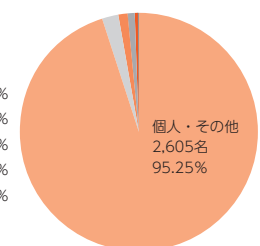
株主名	持株数 (千株)	持株比率 (%)
本田技研工業株式会社	12,103	50.34
大竹栄一	1,312	5.46
ビービーエイチ フォー フィデリティ ロー プライズド ストック ファンド(プリンシパル オール セクター サポートフォリオ)(常任 代理人 株式会社三菱東京UFJ銀行)	968	4.03
株式会社三井住友銀行	457	1.90
埼玉車体株式会社	438	1.82
八千代工業従業員持株会	421	1.75
株式会社三菱東京UFJ銀行	350	1.46
石井良明	286	1.19
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	242	1.01
大竹好子	239	0.99

(注) 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)の所有株式数は全て信託業務に係る株式です。

所有者別株式の分布状況

株主数および比率 (合計2,735名)

■外国人	60名	2.19%
■その他の国内法人	37名	1.35%
■証券会社	23名	0.84%
■金融機関	9名	0.33%
■自己名義	1名	0.04%



株式数および比率 (合計24,042,700株)

■個人・その他	7,469,917株	31.07%
■外国人	1,860,100株	7.74%
■金融機関	1,377,400株	5.73%
■証券会社	164,710株	0.68%
■自己名義	29,248株	0.12%

